

第5章 小阪遺跡出土土器の問題点

— 初期須恵器の時代

森屋美佐子 〔(財)大阪文化財センター〕

1. はじめに

小阪遺跡から出土した古墳時代中期の土器には、いわゆる初期須恵器（定型化していないもの¹⁾）が多量にあり、また、それらに伴う土師器がある。ここでは、それらの一群の土器について見ていきたい。

2. 土器の特徴

小阪遺跡では、地区により土器の特徴に若干の差異がある。それは、当遺跡が自然河川による影響を多大に受けその河川の流路により、大きくは3地区²⁾に分かれることからもうなずけるものである。

まずその1は、現石津川から現陶器川の間でA～D地区で旧石津川の流れの影響下にある地域でC地区の集落が位置する。その2は、現陶器川以東のE～H地区で旧陶器川の影響下にある地域であり、H地区の灰原が位置する。その3は、伏尾丘陵から旧陶器川へ流入する支流の影響下にある地域のI地区で伏尾遺跡の一端の掘立柱建物が位置する。

以上の事を踏まえて、土器を見るならば、以下のような特徴を見出せる。C地区の集落出土の土器とG地区の河川出土の土器・H地区の灰原出土土器を取り上げて、以下に、土器の概略を記す。なお、I地区の出土土器については、この時期の遺構に伴うものがなく割愛した³⁾。

1) C地区出土土器

まず始めに、小阪遺跡の集落が検出されたC地区から出土する土器について概略すると、次のようになる。

①遺構出土の土器

住居址からは、4棟あるうちの住居4のカマド内から完形の須恵器の高坏が1点と、住居6の埋土から須恵器の無蓋高坏片が1点のみであり、他は土師器が出土している。

出土量がわずかであり、確とはしがたいが、土師器では高坏の占める割合が高く、韓式系土器の甗ないし小型平底鉢もしくは回転ナデを多用する須恵器の影響を受けた高坏がある。また、住居5・6のように甗が出土しているにもかかわらず、それに見合う甗が無いのも不思議な感がある。

なお、住居6から精製された粘土の塊が2点、住居5から鉄鏝が4点出土している。

井戸1出土の土器では、須恵器対土師器が、ほぼ1：1である。須恵器では、生焼けぎみの土釜形の坏身や二重口縁壺、焼け歪んだ短頸壺等がある。土師器では、布留系の内湾する口縁部をもつ甗に加えて弥生第Ⅴ様式系の甗および須恵器の形態・調整を真似た甗や、やや長胴化した甗等があり、小型平底鉢も出土している。

土坑では、各土坑により様子が異なり、須恵器対土師器の割合でみると、土坑19では8：2、土坑8では3：7、土坑14では約1：1である。土坑5には韓式系土器の甗や瓦質の甗等があり、他の土坑からも小型平底鉢や甗等が出土している。

なお、土坑19からは土師器を真似て作った須恵器の高坏や静止波状文を施した短頸壺の蓋等が出土している。

2. 土器の特徴

溝では、溝8および溝17からは須恵器と土師器が出土するが、溝3と溝11からは実測可能な土師器が出土していない。前者からは土師器の形態を真似た二重口縁の大型甕や体部に格子叩き目を施す甕が出土しており、後者からは、定型化した蓋坏や甕が出土している。

なお、溝11からは、須恵質の無文当て具と石製勾玉が各1点出土している。

②河川1出土土器

右岸側と左岸側の遺物群で若干の差異があるが、おしなべて見ると若干土師器が多いようである。

右岸側の須恵器では、無蓋高坏に方形透かしが11個穿たれるものや菱形の透かしを穿つもの、ゲタ痕を残す双把手付き蓋、土師器を模した小型壺や甕、並行叩き目と格子叩き目を施した甕等がある。

なお、縄蓆文を施した甕の体部破片と思われるものもある。土師器には、布留系の甕に加えて回転ナデを多用する高坏、小型平底鉢、須恵器を模した大型短頸壺、平底の小型壺等がある。

左岸側の須恵器には、定型化した坏蓋や甕等に加えて、瓦質の大型鉢や陶質土器に似た造りの小型壺等がある。土師器には、布留系の甕に加えて須恵器を真似た甕および壺、小型平底鉢等がある。

遺物群上層の土器には、6世紀代の土器も若干混じるが、ほぼ、遺物群と同時期のものと思われ、須恵器には土師器を模した二重口縁甕や小型壺等があり、土師器には回転ナデを多用する高坏や二重口縁壺、小型平底鉢がある。なお、瓦質の直口壺もある。

なお、河川からは、格子叩き目や斜格子叩き目を施す土師器の体部破片が出土している。

以上、C地区出土の土器を全体的におしなべて見れば、須恵器と土師器の比率はほぼ1:1になり、須恵器では蓋坏および高坏で約半数を占め、壺が2割強を占め、甕は1割にも満たない。土師器では、高坏が4割近くを占め、次いで韓式系土器の小型平底鉢・甕が3割弱、甕が2割強を占め、壺は約1割である。

全体的に、小型品が目立つ。須恵器には、今まで陶邑では類例の無いものが多く、土師器を模した須恵器や稚拙な造りの須恵器、2～3mmの砂粒を多く含むものがあることや、焼きの甘い淡灰白色や淡青灰色をしたものや、断面暗紫灰色の焼きの堅いもの、瓦質っぽいもの等バラエティーに富むものである。

ほとんどのものが、未だ定型化していない過渡期的な段階と考えられ、陶質土器の影響を直接に受けたというよりは、土師器の影響を色濃く受けた須恵器の一群と捉えることができよう。

また、土師器には、伝統的な布留系の甕が多量に出現する一方、韓式系土器の小型平底鉢や甕といった新しい器種が加わり、さらに、須恵器の技法であるロクロ使用による回転ナデや、叩き板や当て具を用いる土師器の一群の出現が特徴づけられる。

2) G地区出土土器

次に、G地区の古墳時代中～後期の河川8出土のこの時期の土器を見ると、以下のようになる。

①河川8下層出土土器

須恵器では、蓋坏の蓋は天井部が平坦な定型化したものがあり、坏身には、それに伴うものの他、各器種バラエティーに富む。鉢・碗、高坏、器台等の口縁部の端部に共通した特徴があり、丸く終わらせるものと、わずかに外反し内傾する面をもつものがある。高坏には、有蓋の碗形の把手付きのものや、やや大型の器台形のものがある。器台には、やや小型の高坏形のものが目立ち、坏底部に凸線文を1条施すものもある。壺・甕の口縁部の端部は丸みをもち端部下に凸線文を1条施すものが多い。

体部の調整は、内外面ともに丁寧にスリケシを施すものと内面に半スリケシを施すものがあり、外面の平行叩き目のなかには、成形のためというよりは文様として意図的に螺旋状に施すものもある。甕は小型の壺形のもので口径が体径のおよそ2/3である。

土師器には、布留系の甕が残るもののその口縁部は退化傾向を示し、外反する口縁部をもち体部が球形のものがある。須恵器を模した甕や鉢、高坏、甕等があるが、縄蓆文や平行叩き目を施すものがある。

②河川8上層出土土器

下層と同様の傾向を示すが、須恵器の甕に装飾性に富むものが出現する。土師器の甕に内湾する口縁部をもちながら、球形の体部に平行叩き目を施すものや、形態は須恵器に似せながら、体部の調整は外面ハケメ、内面ヘラケズリと土師器の技法をもつ壺や土師器の小型壺に穿孔して甕としたもの等がある。

③その他

他に、奈良～平安時代の河川6等からも、この時期の土器がわずかではあるが出土している。

C地区の集落出土の土器と同様にバラエティーに富むもので、陶邑では類例のないものが多い。しかしながら、C地区の土器と共通するものが少なく、河川出土のため確とはしがたいが、時期差ないしは地点差および系譜差が考えられよう。

3) H地区出土土器

さらに、H地区の灰原出土の土器の一群に、この時期に属するものがわずかにある。

須恵器の蓋坏の蓋には、「ハ」の字形に開く口縁部に偏平な天井部をもつもので、天井部の外面に回転ヘラケズリないしは回転カキメを施すものがあり、それに対する坏身には、やや偏平な坏部に内傾する口縁の端部が丸みをもつものと、凹面をもつものがあり、坏底部外面に静止ヘラケズリ、回転ヘラケズリ・ナデ・カキメ等を施すものがある。他に、鉢・碗の類、高坏、甕、器台、壺、甕等がある。

以上の須恵器に共通する特徴は、概して、2～3mmの砂粒を多量に含み、暗緑灰色ないしは青灰色をするもので、やや焼きが甘い感がある。蓋坏および鉢・碗の類の外面に静止ヘラケズリを多用し、高坏、器台、壺、甕等に断面三角形の凸線文を多用し、丁寧に櫛描波状文を施す一群である。壺・甕の体部の調整に丁寧なスリケシを施すものもある。しかしながら、甕でみると口縁部の端部下を強くナデを施すことにより、見せ掛けの凸線文を施したように見えるものがあり、一考を要する。

以上、各地区出土の土器の特徴を概略してきたが、これらを総括して見た場合に、次の様な事が考えられよう。

i) 小阪遺跡のC地区の集落から出土した土器から前述のような特徴を見出せたが、これらのことに加えて、住居から水碓した粘土塊や工具（鉄鏝）、溝から須恵質の当て具等が出土していることから、須恵器を製作していた集落と捉えることができよう。しかも、この集団は、前述の土器の特徴から類推して、すでに土器作りを知っていた集団、すなわち、土師器製作集団の須恵器生産への参入と考えられよう。さらに、このことは陶邑の中における須恵器生産の過程を如実に表していると思われ、韓半島からの窖窯導入による技術指導が一段落し、国内需要に伴う生産に向けて生産拡大する過渡期

3. 土器変化の細分

的な時期とおりしも一致すると考えられる。以上のことは、集落の規模が小さく、不安定な河川の自然堤防上に立地すること等をも考え併せると生産→流出の窓口キャンプ場として領けるものである。

ii) G地区の土器に関しては、河川出土のため一括性に欠けるが、須恵器では、未だバラエティーに富む器種があり、C地区の土器に時期的に重なりはするものの、鉢・埴、高坏等の口縁部の形態に丸みをもつものから、わずかに外反し内傾する面をもつものへと新しい要素が加わることから、時期幅があるようである。このことは土師器に関してもいえ、布留系の甕が残りはするものの、その口縁部が退化傾向にあり、それに加えて、外反する口縁部をもち球形の体部の甕が加わる事や、須恵器の技法を真似た土師器の体部の調整の叩き目に、格子叩き目を施すものが少ないこと等からも領けるものである。

しかしながらこの時期、土師器甕の長胴化が河内地方や四ツ池遺跡等でうかがえるが、ここ小阪遺跡では後出するようである。

iii) H地区の灰原に関しても、二次堆積資料のため一括性に欠けるが、バラエティーに富む器種がある。特に蓋坏に特徴があり、G地区の奈良～平安時代の河川6からも同様の坏蓋が出土しており、この灰原からの流出遺物であろう。全体的に見て若干の時期幅があるようであるが、陶器川の支谷でも初期須恵器の時期に窯が築かれていたことを裏づけるものである。

以上の土器の差異は、前述したように、C地区が石津川と陶器川の合流点に位置し、G・H地区が陶器川およびその支谷に位置することからも、陶邑の中における小地点差および集団系譜差として捉えることもでき、しかも、大きくは時期差に起因するものとも考えられる。

3. 土器変化の細分

そこで、これまで説明してきた土器の特徴を、土器の形態変化を縦軸に遺構出土の一括遺物を横軸に置くならば、次の様な分類ができよう。

1) 土器の形態変化

土器の形態変化を須恵器でみれば、大きくは、蓋坏および高坏、鉢等の類の口縁部の端部で捉えることができる。それは原則的に、丸みをもつものおよび尖りぎみに終わるもの→わずかに外反し内傾する面をもつものや内傾する面をもつもの→内傾する段をもつものへと変化していく様子がうかがえる。

もっとも、旧いタイプのものは残ってくるものとして、いかに新しい要素を拾い出すかが問題となる。

2) 土器の時期区分

以上の土器の微細な形態変化を遺構出土の一括遺物で主にみた場合に、大きくは、2段階に区分できる。

第一期

これまで培われてきた土師器作りをベースに新技術を導入して須恵器作りを始めたため、土師器に似せた須恵器(898.1010.1115.1028等)が出現したり、器形もバラエティーに富み器壁の厚さも一定せず、その焼きも均質でなく灰白色、青灰色、青緑灰色、茶灰色、暗灰青色、暗紫灰色等々様々である。

土師器にしても、主要なものは前時代的なものを受け継ぎながらも、韓式系土器の甕や小型平底鉢をも使用し、須恵器の技法を取り入れた土師器をもつくり出している。

さらに細かくみれば、古・新と2区分できる。

古・新の差異は、須恵器の小型のもの（特に高坏、鉢等）に顕著な特徴を見せる。古段階の須恵器は、口縁部の端部がやや尖りぎみに丸みを持って終わるか平坦面をもつものである。新段階の須恵器は、口縁部の端部近くでわずかに外反し内傾する面をもつもので、壺・甕の類では口縁部の下部に付く凸線文より端部にかけて器壁が薄くなる傾向がなくなり、厚みを変えずに端部が丸みをもって終わるものが増加する。

土師器は、高坏に顕著な差異が見出される。古段階のものは坳形ないしは外反する坏部の口縁端部が丸みを持ち、屈曲する坏部をもつものは、面をもつ。新段階のものは、坳形および屈曲部をもつ坏部の口縁部の端部がわずかに外反する傾向を見せ、外反する口縁部をもつ坏部のものは端部が面を持つようになる。甕でみれば、布留系の口縁部が内湾ぎみに斜め外方へ伸び、端部が肥厚し内傾する面を持つものが、古・新共に主流をなすが、古段階のものは縦長な球形をし、新段階のものは縦長な球形でやや肩の張るものである。体部内面のヘラケズリの範囲が減少する傾向をみせる。

第二期

須恵器作りに慣れてきた段階で、器厚の均質化や調整技法の丁寧さ、さらに、焼成も一定しており、前段階のように色調も色々あったものから、青灰色系から青緑灰色系のものが増える。器形は未だバラエティーに富んでいるが、蓋坏等規格化されたものが見受けられ、定型化への段階である。

土師器を甕でみるならば、やや縦長な体部から球形の体部になり、全体的に寸詰まりの器形になり、口縁部も外反するものが主流をなし、須恵器と土師器が結合して作られたような器種(1503.1504)が出現する。

さらに細かく見れば、第一期と同様に古・新と2区分できる。

古段階のものは数量的に少なく、確実な特徴を見出せ得なかったが、須恵器の甕で見れば口縁部の端部が明確な面を持ち、わずかに垂下させるものがあり、頸部と体部の境目の屈曲が明瞭になる。体部はやや肩の張る球形になる。新段階のものは、蓋坏の口縁部の端部に内傾する段をもつものが出現し、天井部や底部がやや偏平になる。小型の器種の口縁部の端部に内傾する凹面をもつものがあり、甕の口縁部の端部が面をもちわずかに上下に拡張させるものが出現する。

土師器も須恵器と同様に古段階のものが少なく、甕でみれば、布留系の甕の口縁部の開きが大きくなり、端部が肥厚するものが減少する。体部はやや球形に近くなり、体部内面の調整も指ナデのみを用いるものが出てくる。

新段階の土師器は、高坏にハケメを多様するようになり、壺の口縁部の端部は須恵器と同様に内面に凹面をもつものが出現する。韓式系土器の小型平底鉢や叩き目を施す甕の口縁部の端部が面をもち内面に凹面をもつものが出現する。布留系の甕は、体部が球形ないしはやや偏平になり、小型化する。

以上の段階を設定したが、それらを、従来の編年⁴⁾に当てはめてみれば、つぎようになる。

窯編年

・ TK73 ・ TK216・ON46・TK208

小阪遺跡

・ 第一期 ・ 第二期
・ 古 ・ 新 ・ 古 ・ 新

4. おわりに

陶邑古窯址群で一番古いとされているTK73型式並行の土器とも思われるものもなかにはあるが、総じて、TK73型式の土器よりは、新しい傾向を読み取ることができよう。

なお、小阪遺跡出土の土器で見ると、TK208型式をも含めて定型化しつつあるものの、未だ過渡期的な様相が色濃く残っていると理解できよう。

4. おわりに

以上、小阪遺跡出土の古墳時代中期の土器について見てきたが、何分にも限定された資料範囲の操作であるため、推論を多く挟んでしまった感がある。遺構出土のものが少なく、河川出土のものに良好なものが多かったため、一括性に乏しいものとなってしまったが、同時期の集落資料の増加が進めば、小阪遺跡出土の土器の占める位置が確実なものとなると思われる。

今後、他遺跡出土の土器との比較検討を進めて行きたい。

この小稿を書くにあたり、一瀬和夫、岡戸哲紀、小田富士雄、尾谷雅彦、武末純一、田中清美、中井貞夫、萩本 勝の諸氏に御助言、御指導を賜った。記して、感謝したい。

註

- 1) いわゆる初期須恵器と呼ばれているものは、定型化していない土器を指すが、小阪遺跡出土の土器を説明するには、定型化した段階（TK208型式）を含めた方が理解し易いと思われるため、本稿ではそれをも含めて記述している。
- 2) 小阪遺跡の地理的分類は、高橋 学氏の御教示による。本稿 第II部自然科学編第2章を参照されたい。
- 3) 小阪遺跡I地区出土遺物は、伏尾遺跡からの流出遺物が多く、(財)大阪府埋蔵文化財協会 『陶邑・伏尾遺跡』1990 を参照されたい。
- 4) 従来の須恵器の編年は、窯の編年が主で、集落出土の土器による編年が余りなされていなかったもので、小阪遺跡の遺物と並行関係を求めようとするとは違和感があり、独自の編年を組み立てざるを得なかった。しかしながら、小阪遺跡出土の遺物のみでは、全体を埋める資料が得られないのも事実である。TK73型式と小阪遺跡の第一期との空白期を埋めるものとして、最近検出された大庭寺遺跡の灰原出土の土器があげられよう。

さらに、土師器との共伴関係を追うには、須恵器のみを出土する窯の資料では不可能である。また、地域によっては須恵器の出現に時間的な差異があり、土師器と須恵器の共伴関係を明確にするには、今少しの時間がかかりそうである。

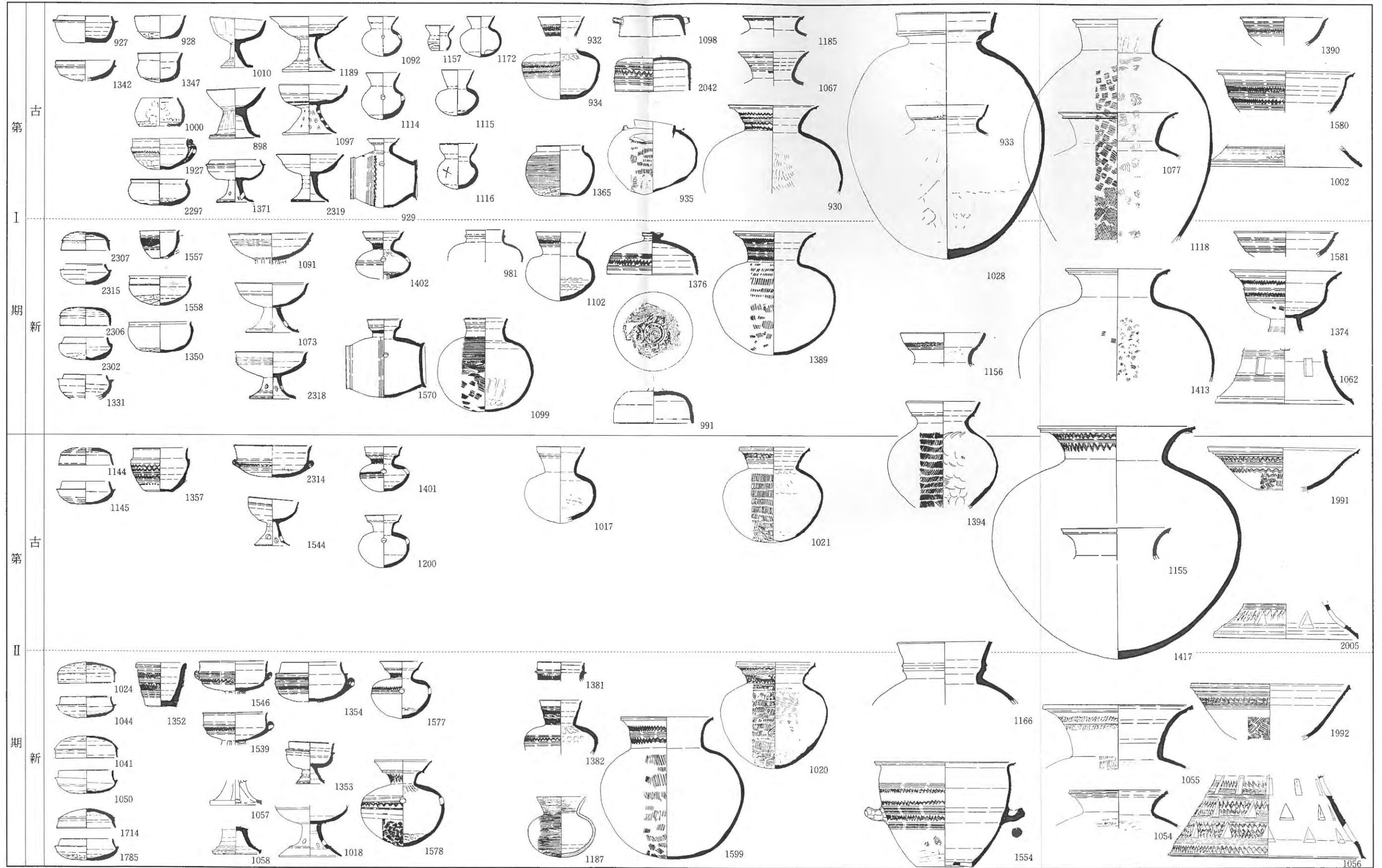


Fig. 481 小阪遺跡出土須恵器分類

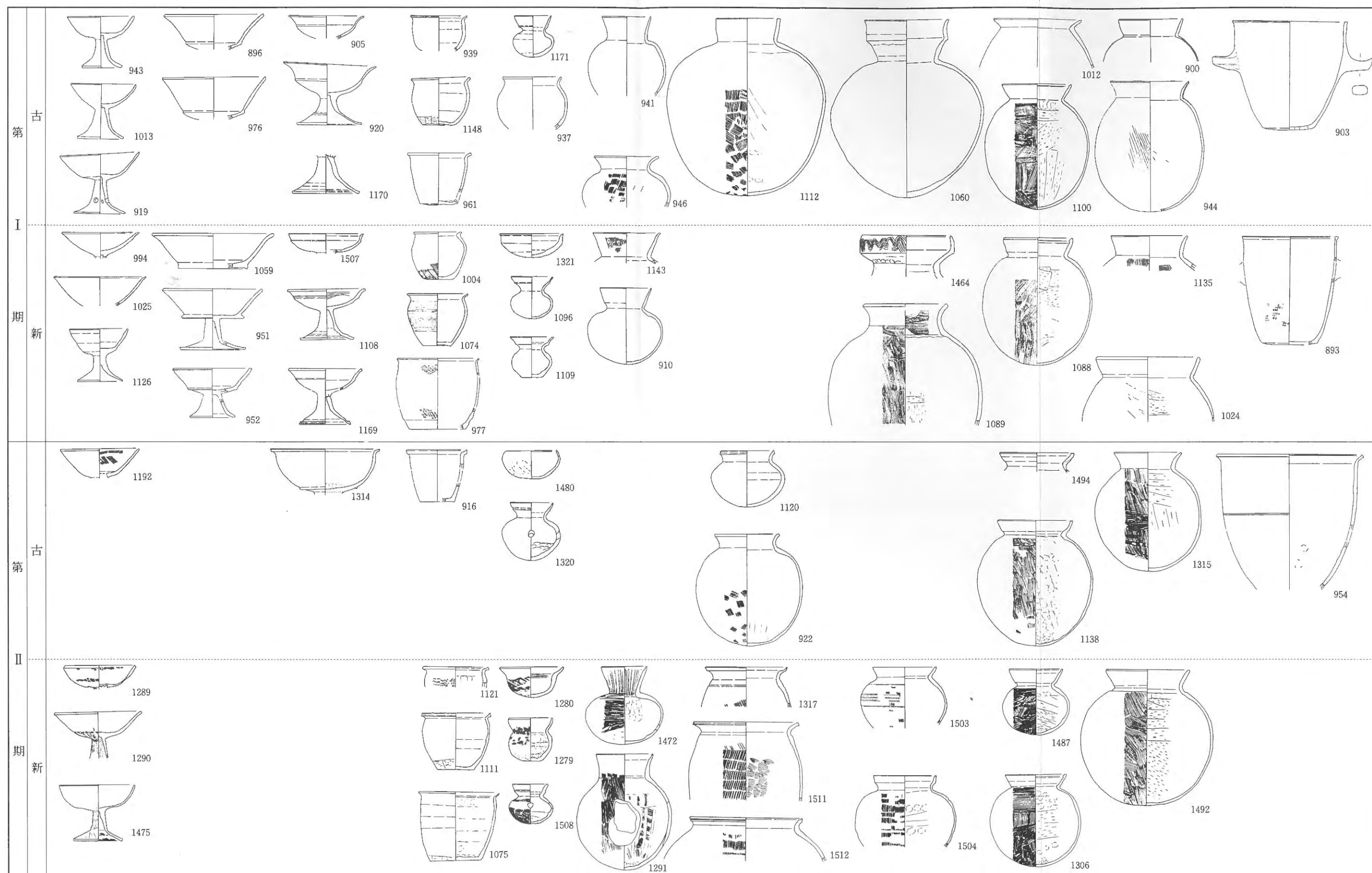


Fig. 482 小阪遺跡出土土器分類